

古文書倶楽部

【発行】
秋田県公文書館
2021. 3
第 100 号

様々な系譜を経た秋田藩士

「常陸以来代々の家臣」
「ばかりでもないようです」

当館には秋田藩士の系譜などについて、様々な史料が保存されています。藩主の佐竹氏は常陸国に平安時代から勢力を持った氏族ですので、秋田藩士の多くは江戸時代に入る前から代々佐竹氏に仕えていた系譜を引く家が多いのですが、中には様々な経緯で秋田藩士となった家があるようです。今回はその中からいくつかの家をご紹介します。

①赤坂氏(陸奥国の国人領主)

赤坂氏は「奥羽永慶軍記」にも度々登場する武将ですが、もとは陸奥国赤坂(福島県)の領主でした。戦国期の当主赤坂朝光は佐竹義重に臣従し、佐竹氏と伊達氏の南奥をめぐる争いでは、伊達氏に寝返る武将も多かった中で常に佐竹氏の側に立って奮戦しました。秋田転封後は米内沢に在陣して一揆を鎮圧、大館城の受け取りに際しては浅利氏旧臣と対峙し、元和元年(一六一五)まで十二所の城代を務めました。戦国期の赤坂氏に関する史料は「秋田藩家蔵文書」に数多く残されており、その活躍ぶりをうかがい知ることができます。

平成十七年三月の第一号発行から、皆様のおかけをもちまして、今回一〇〇号を迎えることができました。今後とも当館をよろしくお願いたします。

②築氏(下野国の豪族)

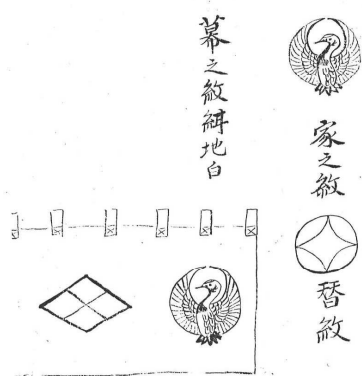
「藤原姓築氏系図」(A二八八・二五五二二)によれば、築氏は結城氏の分流で、永享十二年(一四四〇)の結城合戦では鎌倉公方足利持氏の遺児を支えて関東管領上杉憲実の軍と戦いました。その後数代にわたり結城氏に仕え、宗藤の代には小田原合戦に際し結城晴朝に従って多賀谷・山河・壬生・水谷らの諸将を率い、小山城・松本城を攻略したとあります。宗藤の子である宗勝の代に故あって浪人となり、佐竹義宣に仕えました。秋田転封後は渋江氏の組下として羽州街道の要衝である刈和野に配置され、足軽百人を指揮しました。

③細井氏(徳川家家臣)

細井氏はもと三河国以来の徳川(松平)氏家臣でした。同氏の系図(A二八八・二五九〇・四)によれば、秋田藩士となった細井光信の曾祖父にあたる勝重は、井田野(伊田)合戦で戦死、叔父の勝宗は三方ヶ原の戦いで戦死、光信自身も大坂の陣で首級を挙げるなど、代々徳川氏を支えた家でした。その後徳川(松平)忠長の家臣となりましたが、忠長が不行状のため改易となり、家臣は諸所にお預けとなります。光信は越後国村上藩主堀直寄のもとに幽閉されますが、寛永十九年(一六四二)堀氏が無嗣断絶となったため、秋田に移され、後に秋田藩に仕えました。

④南部氏(中津藩↓直方藩↓秋田藩)

家紋は鶴、幕紋は武田菱の南部氏といえば現在の岩手県から青森県東部にかけてを領した大名家を思い浮かべますが、秋田藩士の南部氏は豊前国中津藩(大分県)小笠原氏に仕えた氏族でした。同氏の系図(A二八八・二四〇七)によれば南部久道の時、藩主小笠原長勝の娘が筑前国直方藩主黒田長清に嫁いだ際に付き従って直方藩(福岡県)に移りました。久道の実子(系図上は孫)、久明は黒田長清の娘、利姫が享保元年(一七一六)秋田藩主佐竹義峰に嫁いだ際に従って秋田藩に移りました。二代続けて嫁ぐ姫に随従して藩が変わった家も珍しいですね。



この他、もとは大名だった宇都宮氏・白川結城氏、伊達政宗の叔父の系譜を引く伊達氏、岩城氏の家臣だった岡本氏、関東管領上杉氏に仕えた上松氏など、様々な経歴を持った人々が集まって、秋田藩の家臣団は構成されていました。現代は各国で人材の取り合いとなっています。秋田県も少子化やコロナに負けず様々な人材を集めることが大事になってくるのではないのでしょうか。

【煙山英俊】

古文書を読むということ

古文書を読むということはどういうことか、ということについて述べてみたいと思います。

古文書講座に参加される方の中には、「くずし字」を読めるようになりたい、という方がいらつしやると思います。ですが、古文書を読むことと、「くずし字」を読めるようになることはイコールではありません。

私は、古文書を読む、ということとは、歴史資料を読むことであると考えています。ですから、文字のかたちはもちろん重視しますが、前後の関係も同様だと考えています。もつとはつきり言うとは、私はひと文字ひと文字のくずし方を解読して、古文書と呼んでいるわけではありません。むしろ、前後の関係を重視して、文字を推測して「解読」することの方が多いためです。

一つの例をあげてみましょう。
次の文字はなんと読めるでしょうか。



これは、「北家日記」の元禄五年三月二十八日の条に出てくる語句です。この部分の翻刻にあたった方の原稿は、「し(志)らちく」とな

っていました。みなさんはどう思われますか？
かたちにこだわれば、そのようにも読めます。しかし、前後の意味が通らなければ問題の解決にはなりません。この前後を加えて、翻刻文をあげてみましょう。

雁ハ大方引無之候由、孫太夫より申来候。今暮合ニ一「」飛候を見候。稀ニハ于今残候と見得候也。今朝も帰雁通候也。

「」部分に写真の語句が入ります。「孫太夫」は、家老の石塚孫太夫で、この時藩主に付添い、浅舞方面にいました。その孫太夫から、「雁はもうほとんどいなくなった」という連絡を受けての記述です。北家当主は、「暮合いに一羽……飛んでいるのを見た。稀には今でも残っている雁もいるようだ」と言っています。

問題は右の……の部分ですが、この前後からすると、目撃された雁が飛んでいた場所をさす言葉が入るのではないかと推測されます。

そのうえでもう一度上の文字を見てみましょう。翻刻原稿が「しらちく」とした「ら」ですが、これは「ろ」でもいけそうです。それでも「しろちく」ではわからない。

そこで、根本から考え方を変えてみます。これは本当に四文字なのか。ひと文字増える可能性はないか。そこで注目したいのが「ち」と「く」の間です。一度筆をひねっているようにも見えます。筆をかるく回転させてできる平仮名でもっとも多いのは「か」です。すると「しろちか

く」となります。「ちかく」は「近く」ではないでしょうか。ならば「しろ」は、「城」かもしれません。しかし、場所は角館、当主が住んでいるところは「御屋敷」と呼ばれることはあっても「城」とはいいません。

それで私は、これは「代掻き」などという「代」、つまり田んぼのことではないかと考えました。「今日の暮合いに、雁が一羽田の近くを飛んでいるのを見た」ということなのです。

ここでのポイントは、文字のくずしをにらんでいても解読の決め手にはならないこと、また、自分が読んだ文字数が正しいかどうかです。最初から四文字にとらわれてしまうと思考がひろがりません。

私は初心者の方には原稿用紙を使うよう勧めます。これには異論もあるようですが、私のいう原稿用紙は、ジグソーパズルのわくなのです。わからないところはどんどんとぼしていつていい。わかるところから埋めていく。そのあと、前後の関係を考えて文字を推測し、用語辞典などでくずしを確認していく、という方法です。ですから、私は床の間に掛けられているような書は読めません。正しくくずし字を読み解く訓練をしていないからです。古文書解読とくずし字解読とのあいだには、微妙な違いがあるのだということです。

【金森正也】